

獨協医大生が国際医療支援を学びに来院

獨協医科大学医学部国際協力支援センター（大平修二センター長）の学生10人が6月12日、城西病院を訪れ、公益財団法人「茨城国際親善厚生財団（IIF）」が行ってきた国際医療支援活動や国際交流について学びました。この講座は、同大学の公衆衛生学実習の一環として、14のテーマから学生が選択する講座で、同病院には「国際保健」を選択した学生が訪れました。

講座ではタイやアフガニスタンの医療支援を行ってきた通所リハビリセンター「茶釜の湯」の荒川邦江副理事長、アフガニスタンの医師で、日本国籍を取得しIIFの職員として活動するアマデアル・亜来春が講師となり、1982年から取り組んだインドシナ難民、エチオピア飢餓難民、アフガン難民の医療支援やゴールドライアングル地域に位置するタイ北部への医療支援や国際交流などについてスライドを交えて解説しました。

学生たちは、アフガニスタンのソ連軍侵攻や同時多発テロ以降のアフガニスタンの状況に興味を示して、いました。また、30年以上にわたって戦争状態が続いているアフガニスタンの現状に対して学生たちは、「支援のきっかけとなったのは何ですか」、「乳児死亡率が高いアフガニスタンの子供たちのお産の現状はどうなっているのですか」など熱心に質問。引き続き城西健診センターや天然温泉を使った通所リハビリ「茶釜の湯」を見学しました。茶釜の湯では施設を見学後、利用者さまと話をしたりして、地域医療や福祉にも強い関心を見せていました。

2019年6月14日

